

令和六年二月

大学院文学研究科

齋藤 樹里 提出 学位申請論文

『日本近代文学における「芝居」と「女性」——太宰治・齋藤緑雨を中心に——』審査報告書

國學院大學

齋藤 樹里 提出 学位申請論文（課程博士）

『日本近代文学における「芝居」と「女性」——太宰治・齋藤緑雨を中心に——』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は日本近代文学において、歌舞伎、文楽、義太夫そして常磐津を中心とする「芝居」の受容がどのように行われていたか。特に前近代から近代への過渡期における小説創作の実態に、所謂西欧文学からの移入状況ばかりではなく、江戸期から継続している大衆文化が接続していることを改めて考察したものである。したがって、この論点から導出されるのは、日本近代文学史に江戸期から昭和期までを貫く物語行為の内実に、日本文学の伝統的な特質を見極めてみるということである。

本論文の第一章「近代とは何か——明治二十年代と「芝居」——」は、第一節から第三節まで齋藤緑雨の「かくれんぼ」、「油地獄」、「門三味線」の三作品を、

第四節で坪内逍遙の「梓神子」を事例として、各作品の物語行為において、「芝居」（明治二十年代前後に受容されていた歌舞伎、浄瑠璃、常磐津の詞章）の文言がどれほど多用されているか、まずは引用の典拠を精査するという地道な基礎作業を行っている。その調査結果を踏まえて、それら引用された詞章等各作品の登場人物の造型に関わる語り、また特に心情を描写するところに如何に寄与しているかを考察するものである。この第一章では、齋藤緑雨による上記三作品の新たな作品分析の方法を提起し、緑雨の近代小説を再評価する見通しを論じている。また、坪内逍遙「梓神子」の分析においては、森鷗外との「理想論争」の経緯の中で分析評価されて来た先行研究に対して、前近代文学の批判から近代文学の確立を目指していた坪内逍遙が、前近代の狂言作者をどのように評価しつつこれを克服しようとしていたか。単純な前近代批判に留まることなく、実は前近代と近代の文学を接続させる試みを実行していたという視点を提案している。

第二章「太宰治〈女性独白体〉①——構築される「女性」——」は、太宰治の所

謂「女語り」、「女性独白体」の物語行為を表現し、それが太宰治作品の大きな特質を捉えられて来た作品群について、この物語行為がいかなる振る舞いを以てその行為主体を形成していくのかという行為論的な視点に立って、改めて考察したものである。「燈籠」、「きりぎりす」、「千代女」、「皮膚と心」、「待つ」、「饗応夫人」の作品論を六節に分けて論じている。これらの論考に通底するのは、所謂〈女性独白体〉の物語行為が特質として評価されて来た太宰治作品の語りが、単なるモノローグとしての「独白」ではなく、自分自身に返ってくる「独白」、つまり自己再帰的な語りとして検討する試みとなっており、これら「女性独白体」を物語行為とする作品群の主体となる「私」が、語る行為によって「女性」を演出し、自らを「女性」として構築していく様相を明らかにしている。

第三章「太宰治〈女性独白体〉②——「芝居」の中の「女性」——」は、第一章のキーワード「芝居」、第二章のキーワード「女性独白体」を統合した論点を以て太宰治「おさん」と「ヴィヨンの妻」の二作品を考察するもので、第一章の手法である「芝居」の引用箇所を精査し、その文言が作品読解に影響を及ぼ

すところを余すところなく論じており、両作品の先行研究への批判検討を踏まえて、これまでも注目されて来た太宰治の義太夫体験を捉え直し、それらの伝統的な物語を「覚え込んでいた」と自ら述べる作家の体験を、その作品読解への新たな視点として提案している。

附章の「近代文学研究の手法と可能性―比較文学、蔵書調査―」は、森敦「天上の眺め」とその韓国語訳の比較考察と、國學院大學の旧折口博士記念古代研究所所蔵資料類の中から、室生犀星から折口信夫への献呈本の実態調査と、そこから浮上する交流関係の考察となっている。

論文審査の要旨

本論文の主旨については、「序章 近代文学の「芝居」と「女性」」において端的に示されている通り、「芝居」と「女性」という二つのキーワードを中心に考察を進めるものである。具体的には、齋藤緑雨の小説作品と太宰治の小説作品を取り上げて分析、考察しようとしている。その手続きは、「同時代言説や同時代の社会文化状況、当時既に成立していた文学や芝居のような先行テキストを足掛かりに」していくと記された上で、本論文で使用する「芝居」は所謂「旧劇」とされている、歌舞伎、文楽（人形浄瑠璃）の舞台や狂言台本、そして義太夫や常磐津といった邦楽・舞踊というところを範囲とするとしている。

ともすれば西欧文学の強い影響下にあった作家と、その作品を中心として把握されて来た日本近代文学の概念にあつては、逆に、日本の伝統文学からの流れが蔑ろにされて来たところが否めない。その側面に光を当ててみることで、前近代から近代への文体と物語の流れを精査し、ともすれば前近代性を指摘さ

れるが故に貶められていた文学作品の再評価を促そうとする論点である。たとえば、西欧文学、文化を摂取し、外国語の能力を駆使して翻訳を手がけつつ創作に取り組んだ近代作家たちは、その時代における一握りの知的エリートであったが、翻って先に示した「芝居」ほど多様な媒体でその当時の大衆に浸透したものはなかった。近代文学の読者で、特に同時代読者の文化的素養を踏まえるなら、日常生活に密着した文化としての「芝居」を背景にした作品享受の様相は、改めて掘り起こされてしかるべきであろう。そして、こうした分析にとっては、齋藤緑雨が稀代の芝居通であったということからも、考察対象としての特権性を有しており、その作品における「芝居」の要素を点検した上での作品再評価は意義深いものであろう。また、第二のキーワードである「女性」とは、〈女性全般〉ではなく、太宰治作品に特徴的に見られる〈女語り〉、〈女性独白体〉によって表出される概念である。これらの作品群から代表的なものを取り上げ、語り手が女性であるという判断を前提にして来た読み、従来の作品解釈の偏向性を解体し、一人称回想体の物語行為の過程において、〈女性〉

が語り手のあり方として、語り出され、読み出されていくという行為論的な作品評価を目指すものである。

以上のように、「芝居」と「女性」という論点は、本来的には個別なものであり、それぞれが第一章と第二章の論考群にまとめられている。しかし、この二つを結び合わせた考察の成果が太宰治の「おさん」と「ヴィヨンの妻」という二つの〈女性独白体〉作品への読解へと展開し、本論文の第三章として位置づけられている。

第一章「近代とは何か―明治二十年代と「芝居」―」は、齋藤緑雨の「かくれんぼ」、「油地獄」、「門三味線」、そして坪内逍遙「梓神子」の四節からなっている。

齋藤緑雨による三作品の考察では、まず「かくれんぼ」の特異な地の文に溶け込んでいる多様な「芝居」の要素を指摘、たとえば『仮名手本忠臣蔵』、『伊勢音頭恋寝刃』や『心中天網島』などの主要な場面、あるいは登場人物の紙屋治兵衛、遊女小春の持つイメージを、「かくれんぼ」の山村俊雄、小春、お夏

へと語り手が準えつつ物語って行くことで、引用元の物語内容や各人物に伴う豊かなイメージが喚起され、本作の心理描写を補完すると論じ、緑雨の近代への批判的姿勢に基づく作品という従来の評価を問い直す。しかし、「芝居」との類似性ではなく、差異において「かくれんぼ」の人物造型の「近代」が問題化されるという着想には、さらなる検討、言及が欲しい。「油地獄」論は、そのタイトルから連想される近松門左衛門『女殺油地獄』との比較考察になるが、本作発表時の前後に隆盛する近松浄瑠璃鑑賞、再評価の動きを、坪内逍遙らの近松研究会の活動などを踏まえながら、同時代の近松ブームの中において緑雨の「油地獄」を読み直す試みである。「女殺」という設定がない本作では、殺人という行為がもたらす地獄とは逆向きに「個の内面」を指向する心情の地獄を表現し、引用元と本作とを往還する読みにおいてそれは明確化すると論じるが、それらの差異を照応させる読みの力学の考察が課題となる。つづく「門三味線」論は、樋口一葉『たけくらべ』と比較考察されることが通例であった本作を、本文中に織り込まれる常磐津の物語と音曲の解明から、常磐津の詞章を

踏まえつつ展開される物語の読解へ向けての考察である。本論の指摘で重要なのは、「門三味線」本文に見える（一）～（廿三）までの章立ての小見出しがすべて常磐津の詞章からなっているという調査であり、そこから本作の物語を常磐津の物語が促しているという読解の可能性が開けてくる。本論では一部の指摘のみに留まっているが、さらなる考察を期待したい。さて、坪内逍遙「梓神子」は、森鷗外との〈没理想論争〉の射程において検討されて来たが、本作の構造へ視点を向ければ、梓神子という前近代的な装置と前近代的な文体で近代批評を論じるという実験とも考えられ、そこから「おのれ」による前近代と近代の接続の試みであると論じる。西鶴や近松の怨霊が梓神子に憑依し、近代批判を述べ、語り手「おのれ」が反論するが、それも「取次老爺」に批評されるという構造を指摘し、充分に示唆的ではあるが、この構造の動き、仕組みについて詳述して欲しい。

第二章 「太宰治〈女性独白体〉①―構築される「女性」―」は、「燈籠」、「きりぎりす」、「千代女」、「皮膚と心」、「待つ」、「響応夫人」の作品論を六節に分

けて論じる。これらの論考に通底するのは、所謂〈女性独白体〉の物語行為が特質として評価されて来た太宰治作品の語りが、単なるモノローグとしての「独白」ではなく、自分自身に返ってくる「独白」、つまり自己再帰的な語りとして検討する試みである。「燈籠」の「さき子」は新聞記事や手紙という〈記録〉をみずからの〈記憶〉で再構成しつつ、自らの語りによって自らを獲得すると論じる。「きりぎりす」は、夫の言葉を〈剥奪〉し続ける「私」が、外部にいる「こほろぎ」を自己内部の「きりぎりす」へ転位させるように、私だけに「わかる」夫を希求する「私」のエゴイズムの表出と捉える。「千代女」は、「千代女」になれない「和子」が、「千代女」ではないことを語り続けつつ、「千代女」になりたい願望を表出してしまいう結末に、自己認識と他者からの認識・評価の差異への葛藤を見出し、この動きを「独白」の内実とみる。また「皮膚と心」では、「女心」の描出という評価を批判し、性差を前提とする読みから、あくまでも「私」個人の心理を語る「独白」であり、その物語行為の過程にあって〈女〉としてあることを獲得していくと論じる。「待つ」は、発表媒体の特質か

らみて、同時代に流行した〈コント〉という批評性を含意する作品と位置づけ、「私」の「待つ」行為のみを語り続けるところに、既成の価値観への批評性が読み取れるとする。また、「饗応夫人」では、「奥さま」を相対化しているように語る「私」が、客人に対して限りなく「饗応」する「奥さま」を語り続ける行為によって、「私」自らを「奥さま」と同化させ、語り手「私」が「饗応夫人」になってしまおうと結ぶ。

以上の作品論は、「私」の一人称独白体という物語行為によって、語り手が〈女〉になってしまうという機能を中心に分析しており、その着想に異議はないが、〈女〉になるという事象の仕組みの解明に言葉を尽くすべきであり、〈構築主義〉を標榜するものの、やや実体論的な解釈に留まっている傾向がある点、再検討を促したい。

第三章 「太宰治〈女性独白体〉②——「芝居」の中の「女性」——は、本論文の核心をなす2本の論考、「おさん」論と「ヴィヨンの妻」論を収めている。

「おさん論」は、「小春の欠如と見立てられた「おさん」という副題が示す

通り、本論文第一章での論点が活かされている。太宰治の義太夫体験は周知のこと、本作も『心中天網島』等を典拠として論じられて来ているが、典拠作品における曾根崎新地の遊女「小春」という人物が、太宰の「おさん」には見当たらないこと、この差異について着目した論考である。作中の「私」が、「夫」を紙屋治兵衛へ、自らを「おさん」へ見立て、これと同一化しようとする語りは、自らを騙りながら「夫」の心中事件を意味付けようという行為であるとする考察は説得力に富む。また、「ヴィヨンの妻」論は、椿屋の主人から「私」が「おかる」と見立てられたことから、本作に胚胎する『仮名手本忠臣蔵』の断片を精査し、しかし単なる影響関係ではなく、この典拠を乗り越えようとする「私」の語りを指摘するところ斬新な論考となっている。

附章「近代文学研究の手法と可能性―比較文学、蔵書調査―」は、森敦「天上の眺め」とその韓国語訳の比較考察と、國學院大學が所蔵する折口博士記念古代研究所所蔵資料類の、室生犀星から折口信夫への献呈本の実態調査と、そこから浮上する交流関係の考察となっている。前者は韓国語の語学力を駆使し

た論者ならではの論考であり、後者は折口信夫近代文学関係旧蔵本の初めての調査報告が中心となっている。どちらもまた今後の進展に期待したい。

さて、第一章、第二章におけるの諸論考は、有意義な問題提起に発しているものの、結論部の言及がやや不足気味であり、作品読解よりも依拠している分析概念が強調されるなど課題を残す論述が散見される。また、〈近代〉、〈前近代〉、〈物語〉などの近代文学研究上の概念が自らの十分な批判検討を経て使用されているか覚束ないところも見受けられる。これらは改めて論者において熟考することを要するものである。

しかし、第三章では、これまでの論考での試行錯誤が実を結び、論者ならではの研究成果を提出し得ていると考える。典拠と見なされる原典資料の博搜に終始することなく、そこからの独自の独自な問題提起は、新たな研究領域の開発を期待させるものであり、今後のさらなる追究を望みたい。

以上の理由から、本論文提出者齋藤樹里は、博士（文学）の学位を授与される資格があるものと認められる。

令和六年二月十五日

主査 國學院大學教授

石川 則夫

⑩

副査 北海道大学教授

中村 三春

⑩

副査 福岡女学院大学教授

大國 眞希

⑩